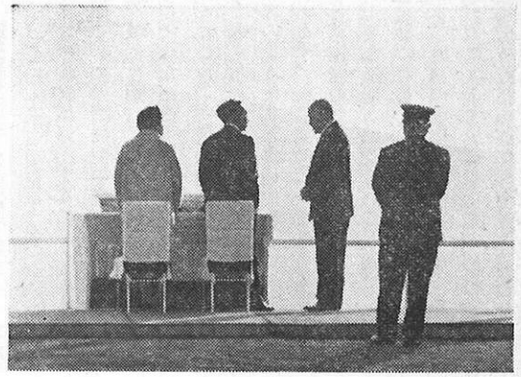


特集Ⅱ

一九六六年をふりかえる

一九六六年。天草架橋の完成、国道五七号線をはじめ各道路網の整備、九州縦貫高速道、緑川ダムの着手と、いわゆる懸案の事業が完成し、また新たな事業が開始されるという発展の年であった。

この県勢伸長の状況には、十月、県民あげてお迎えした、天皇皇后両陛下も、ことのほかお喜びのご様子であった。

ゆく年をふりかえり、また、来たるべき年に、新たな気持でのぞみたい。

史上最高の豊作

本年の県下の稲作は、「新くまもと米つくり運動」にかかげた生産目標三五万㌧をはるかに上廻る三六万九、四〇〇㌧と公表（十一月一日統計調査事務所発表十月十五日現在）された。これは、水稲が一〇㌃あたり四七〇㌔（県平均）で、本県の稲作史上からみると昭和三三年の一〇㌃あたり四二六㌔をはるかに突破するものであり本県の稲作史上最高の記録をつくったことになる。陸稲は、七月から八月までの干天続きのため、白葉、出すくみ、青立ちがみられ平年作を大きく下廻り一〇㌃あたり一二〇㌔である。

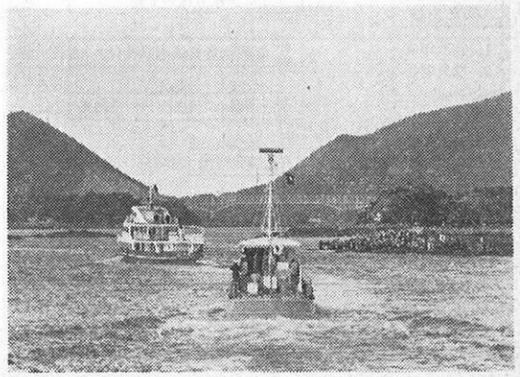
本年の稲作、特に水稲についてふりかえってみると、気象的には、日照に恵まれしかも毎年といってよい程被害をあたえる水害或は台風害が本年は殆んど直接影きょうがなく、登熟期も一時低温の時期もあったがその後恢復して好天に恵まれ、一部に用水不足によるかんばつをうけた地帯はあったが、一般的には、良好であったこと。

それ以上に本年度から県、農業団体、市町村等が一体となって推進した「新くまもと米つくり運動」が、農家の自主的なもりあがりと相まって、組織による米づくり意欲となってあらわれた、その努力の結晶によると考えられる。

技術的にみれば、昭和三七年度から急速に普及した「ホウヨク」「シラヌイ」等の短稈穂数型品種が、栽植密度の増加施肥改善、病害虫の防除徹底等の技術浸透によって、その実力をいかんなく発揮し、かつて農林十八号、宝によって代表された長稈型の倒伏する稲が、台風がきてもびくともしないような本県平坦部の稲の新らしい姿の第一段階をつくったというべきである。

本年のこの水稲の豊作を機会に、「新くまもと米つくり運動」の推進によせられた関係者の米つくりに対する意欲並びに本県平坦部の倒伏しない稲の姿の基礎となる「ホウヨク」「シラヌイ」等を育成された方に敬意と感謝をささげたい。

今後本県の稲作をなお伸ばし安定させるためには、まだまだ残された問題が多い。不足する傾向が続いている農業労働力に対応して機械化をすすめる条件である基盤整備の促進。阿蘇、矢部、球磨、天草の収量が比較的低い地方の品種や栽培法（阿蘇、矢部地方は長稈種であるため、本年も台風二十一号の後の秋雨前線の停滞により倒伏がみられた。）の研究開発。新しい生産組織としての米つくり集団の自主的な運営と発展等は最も主要な当面の課題である。特に「新くまもと米つくり運動」で取組まれている集団は今後の米つくりの中核となるものと思わ



＜基盤整備がすすみ大型農業機械が活躍＞

れるので、関係農家や農協が主体意識を確立して、自分達の力で運営し将来の方向に努力せられることを期待する。

阿蘇スカイライン調査開始

予備検討路線

九州横断道路「やまなみハイウェー」の完成を一年四カ月後にひかえた昭和三八年六月、日本道路公団に阿蘇スカイライン調査の見込みを打診したところ、公団福岡支社では、調査路線編入は勿論であるが、その前段階の予備検討さえも着工を前提とするものであるから慎重を要するとして難色をみせたが、県および地元関係者の再々の陳情と熱意により、この路線の重要性を認識し、昭和三九年九月福岡支社が概略検討のための現地検討に着手した。その結果

1．別府阿蘇道路「やまなみハイウェー」に得られない外輪山沿いの景観を得ることができ、別府阿蘇道路の価値をさらに増大する。
2．菊池溪谷の魅力の開発ができる。
3．阿蘇と北部九州各都市とを直結できる。
4．別府と長崎を結ぶ最短ルートであり

九州横断道路および国道五七号線のバイパスとなる。以上のような結論がだされ、スカイラインの価値が認められて、四〇年六月、公団の予備検討路線となった。

その後、道路公団本社の企画調査部長、計画調査課長、福岡支社長、建設省県財界人新聞記者団など多くの人々の現地調査が相次いで行なわれた。

また昭和四〇年一一月には計画中の九州縦貫高速自動車道の「菊水インターチェンジ」が本決まりとなり、機いよいよ熟し、四一年三月に上村道路公団総裁の現地調査がなされるまでに至った。

調査路線

昭和四一年六月ついに全国五路線の一つとして調査路線に正式採択され、道路公団の本格的調査が開始された。この調査には、第一次調査と第二次調査があり四一年から第一次調査が行なわれる。

この第一次調査には、(イ)資料蒐集 (ロ)五、〇〇〇分の一図化と同図による路線の概略検討 (ハ)交通流動調査 (ニ)土質調査等があり、第二次調査には (イ)空中写真の一、〇〇〇分の一図化 (ロ)用地調査 (ハ)実施設計等がある。

阿蘇スカイライン地域は、かねて、県が経済企画庁にお願いして総合土地利用調査費約二、五〇〇万円で五、〇〇〇分の一図化を終っていたため、現在公団は路線の検討や資料蒐集、アンケート調査を行なっている。特に、幽すいな菊池溪谷をできるだけ保護するような道路計画や、大規模草地改良との関連、起終点の問題などを検討している。

県においても、スカイラインと密接不可分の城北横断公共道路の整備を急ピッチで実施しており、またスカイライン予定路線周辺の土地利用調査のための現地調査も行ない、自然景観の保護についても検討をすすめ、四三年度着工を目途に全面的に協力体制を確立している。

特に四一年九月二六日には道路公団富樫総裁が現地を調査され、かぶと岩での阿蘇外輪の雄大さや、菊池水源での溪谷美を満喫され、公団の調査路線のなかでも有望な路線であるとの意向を伺いさらに着工への意欲を燃やしている。

阿蘇スカイラインの調査が極めて順調に進んだ場合には、四二年度第一次調査を終え完了、四三年九月まで第二次調査を終え十月に着工となろうが、九州横断道路や天草架橋が、着工までに幾多の紆余曲折があったように、延長二八㌔、二五億円におよぶ大事業であるので、実現までに幾多の問題もあろうが、地元期成会をはじめ、関係者と一体となって早期着工をはかりたい。